

調査研究役務請負契約条項

第1章 総則

(契約の目的)

第1条 乙は、この契約書のほか、この契約書に付属する仕様書並びに参考として仕様書に添付された図面、見本及び図書（以下「仕様書等」という。）に定めるところに従い、調査研究（以下「研究等」という。）を行い、契約履行期限までに研究等の報告書を提出し、甲は、その代金を乙に支払うものとする。

(代金)

第2条 契約金額をもって、乙に支払われる代金の金額とする。ただし、特約条項を付して支払金額を確定することを約定する場合は、当該特約条項の定めるところに従い確定するものとする。

(債務の引受け等の承認)

第3条 乙は、次の各号に掲げる場合は、あらかじめ書面により甲の承認を受けなければならない。

- (1) この契約に基づく債務の全部又は一部を第三者に引き受けさせる場合
- (2) この契約に基づく債権の全部又は一部を第三者に譲渡する場合
- (3) この契約の全部又はその主要部分を第三者に請け負わせる場合

2 甲は、前項第1号及び第2号に掲げる場合においては、この契約の履行上支障を生ずるおそれがない限り、速やかに承認を与えるものとする。

(代理人等の届出)

第4条 乙は、次の各号に掲げる場合は、あらかじめ書面により甲に届け出なければならない。

- (1) この契約の履行に関する事務の全部又は一部を行わせるため、代理人を選任する場合
- (2) この契約の主要部分でない部分（軽易なものを除く。）を第三者に請け負わせる場合

(下請負)

第5条 乙は、この契約の一部を第三者に請け負わせる場合においても、この契約により乙の義務とされている事項につきその責めを免れない。

(特許法等上の権利の侵害の禁止)

第6条 乙は、この契約の履行にあたり、第三者の有する特許法、実用新案法若しくは意匠法上の権利又は技術上の知識に関し、第三者が乙に対して有する契約上の権利を侵害することのないよう必要な措置を講ずるものとする。

2 乙が、前項の必要な措置を講じなかったことにより甲が損害を受けた場合は、甲は、乙に対してその賠償を請求することができる。

(契約書及び仕様書の優先並びに仕様書等の疑義)

第7条 参考として仕様書に添付された図面、見本及び図書が契約書及び仕様書に定めるところと矛盾する場合は、契約書及び仕様書が優先する。

2 乙は、仕様書等に疑義がある場合は、速やかに甲の説明を求めなければならない。この場合において、乙は、当該説明が文書によってなされるよう要求することができる。

3 乙は、前項の説明に従ったことを理由として、この契約に定める義務の履行の責めを免れない。ただし、乙が、その説明の不適當なことを知って、速やかに甲に異議を申し立てたにもかかわらず、甲が当該説明によることを求めたときは、この限りでない。

(監督官等の派遣)

第8条 甲は、この契約の適正な履行を確保するため必要があると認めた場合は、甲の指名した監

督官、検査官及びその他の職員（以下「監督官等」という。）を乙の営業所、工場その他関係場所に派遣するものとする。

2 甲は、監督官等を派遣する場合は、その権限及び事務の範囲を乙に明示しなければならない。
（輸送費）

第9条 役務に必要な輸送費用（梱包を含む。）は、代金に含まれるものとする。

第2章 契約の履行

第1節 官給品等

（官給品等の支給及び貸与）

第10条 乙がこの契約の履行のため支給又は貸与を受ける資料、材料、部品、機器、治工具、測定具等（ソフトウェアその他の電子計算機情報を含む。以下「官給品等」という。）の品目、数量、支給又は貸与を受ける期日及び場所その他必要な事項は、契約書又は仕様書の定めるところによる。

（官給品等の保管引取り等）

第11条 乙は、官給品等の支給を受ける場合は、これに立ち会い、品目、数量等について、契約書及び仕様書と照合のうえ、異状（品質又は規格が使用に不適當な場合を含む。以下同じ。）の有無及び数量の過不足を確認するものとし、異状又は数量の過不足を発見した場合は、直ちに甲の指定する者に申し出て、その指示を受けるものとする。後日、異状及び数量の過不足を発見した場合もまた同様とする。

2 乙は、官給品等の支給又は貸与を受けた場合は、これと引換えに受領書を甲の指定する者に提出するものとする。

3 乙は、官給品等をこの契約の目的以外に使用し又は利用してはならない。ただし、甲の指定する者を経由して甲の承認を受けた場合は、この限りでない。

4 乙は、官給品等を善良な管理者の注意をもって保管しなければならない。

5 乙は、官給品等について、出納及び保管の帳簿を備え、その受払を継続的に記録整理し、その状況を明らかにしなければならない。

6 官給品等の性質によって生じた役務の成果の契約不適合については、乙は、この契約に定める責めを免れる。ただし、乙が官給品等の異状を知って速やかに甲に告げなかったときは、この限りではない。

7 官給品等の引取り及び保管に必要な費用は、代金に含まれるものとする。

8 官給品等の異状を甲の指示により乙が修補した場合は、その費用は、甲の負担とする。

（官給品等の返還）

第12条 乙は、支給又は貸与を受けた官給品等につき必要がなくなった場合は、速やかに甲に通知し、甲の指示するところに従い、返品書及び使用部品明細書を添えてこれを甲の指定する者に返還しなければならない。

2 返還に必要な費用は、甲の負担とする。

第2節 監督及び検査

（監督）

第13条 甲の指名した監督官は、乙の行う役務について契約書、仕様書等及び甲の定める監督実施要領に基づき、甲が必要と認めた場合又は乙の申請があった場合において、立ち会い、指示、審査、確認その他の方法により必要な監督を行うものとする。

2 乙は、前項の規定により監督官が監督を行う場合は、これに応じなければならない。この場合

においては、第7条第3項の規定を準用する。

3 監督を受けるのに必要な費用は、代金に含まれるものとする。

(完成検査)

第14条 甲の指名した検査官は、乙の行う役務について、契約書、仕様書等及び甲の定める完成検査実施要領に基づき、前条第1項に準じて検査を行うものとする。

2 前条第2項及び第3項の規定は、本条において準用する。

第3節 納入

(給付の終了の届出)

第15条 乙は、報告書の持込みの完了により乙の契約に基づく給付が終了した場合は、直ちに役務完了届を提出しなければならない。

第4節 代金の支払

(代金の請求及び支払)

第16条 乙は、役務を完了した場合は、代金を甲の指定する者に請求することができる。

2 乙は、代金を請求する場合は、甲の完了の確認を得たうえ、適法な支払請求書をもってするものとする。

3 甲は、前項に定める支払請求書を受領した日から30日以内に乙に当該金額を支払うものとする。

(支払の特例)

第17条 甲は、特約条項の定めるところにより前払金を支払う。

2 甲は、特約条項の定めるところにより部分払を行う。

(支払遅延利息)

第18条 甲は、約定期間(第16条第3項の期間をいう。以下同じ。)内に代金を乙に支払わない場合は、約定期間満了の日の翌日から支払をする日までの日数に応じ、未支払金額に対し、年※. ※パーセントの率を乗じて計算した金額を遅延利息として乙に支払わなければならない。ただし、約定期間内に支払をしないことが天災地変等やむを得ない理由による場合は、当該理由の継続する期間は約定期間に算入せず、又は遅延利息を支払う日数に計算しないものとする。

2 前項の規定により計算した遅延利息の額が100円未満である場合は、遅延利息を支払うことを要せず、その額に100円未満の端数がある場合は、その端数を切り捨てるものとする。

(契約保証金による充当)

第19条 甲は、第32条第1項の規定により違約金を徴収し、又は同条第2項の規定により損害賠償を請求する場合は、乙が提供した契約保証金をもってこれに充当するものとする。

2 乙が、契約保証金に代えて担保を提供した場合には、前項の徴収又は請求は相当の期間を定めて行うものとし、その期間内に支払がなかったときは、甲は、これを換価して得た金額をもって違約金又は損害賠償に充当するものとする。

第5節 契約履行期限の猶予及び履行の遅滞

(履行の猶予)

第20条 乙は、理由を付して、契約履行期限の猶予を申請することができる。

2 甲は、前項の申請があった場合においては、契約の目的の達成に支障がないと認める日まで契約履行期限を猶予することができる。

3 乙は、契約履行期限を過ぎた後においても、第1項の申請をすることができる。

(延納金)

第21条 乙は、前条第2項の規定により契約履行期限が猶予された場合においては、延納日数に

応じた延納分に相当する代金に対し、1日につき0.1パーセントの率を乗じて計算した金額を延納金として甲に支払わなければならない。ただし、延納分に相当する代金の10パーセントの金額をもって限度額とする。

2 前項の規定において「延納日数」とは、次の各号に掲げる日数から乙の責めに帰することができない理由によって納入が遅れた日数、その他取引の性質等の事情を考慮して延納金の支払を求めることを不相当とする日数を除いた日数をいう。

(1) 契約履行期限以前にされた申請に基づいて契約履行期限が猶予された場合において、猶予された日までに延納分を納入したときは、従前の契約履行期限の翌日から納入した日までの日数

(2) 契約履行期限以前にされた申請に基づいて契約履行期限が猶予された場合において、猶予された日までに延納分を納入しなかったときは、従前の契約履行期限の翌日から猶予された日までの日数

(3) 契約履行期限を過ぎた後においてなされた申請に基づいて契約履行期限が猶予された場合において、猶予された日までに延納分を納入したときは、申請した日の翌日から納入した日までの日数

(4) 契約履行期限を過ぎた後においてなされた申請に基づいて契約履行期限が猶予された場合において、猶予された日までに延納分を納入しなかったときは、申請した日の翌日から猶予された日までの日数

3 前項の規定の適用においては、納入は第15条の届出があったときになされたものとみなす。

4 乙は、甲が相当の期間において指定する期日までに第1項の延納金を支払わない場合は、その期日の翌日から支払のあった日までの日数に応じ、当該延納金に対し、年※. ※パーセントの率を乗じて計算した金額を遅延利息として甲に支払わなければならない。

(遅滞金)

第22条 乙は、役務の完了が契約履行期限に遅れた場合には、遅滞日数に応じ、遅滞分に相当する代金に対し、1日につき0.3パーセントの率を乗じて計算した金額を遅滞金として甲に支払わなければならない。

2 前項の規定において「遅滞日数」とは、契約履行期限の翌日から遅滞分の納入した日（契約履行期限を過ぎた後においてなされた申請に基づいて履行が猶予された場合においては、当該申請があった日）までの日数から乙の責めに帰すことができない理由によって遅れた日数を除いた日数をいう。

3 前条第3項の規定は、前項の場合に準用し、前条第4項の規定は、第1項の場合に準用する。

第3章 契約の効力等

(完了不能等の通知)

第23条 乙は、理由のいかんを問わず契約履行期限までに役務を完了する見込みがなくなった場合、又は第25条の規定により甲の負担となるべきものが発生した場合は、直ちに甲にこの旨を通知するものとする。

(危険負担)

第24条 甲乙双方の責めに帰すことができない理由により、役務を行うことができなくなった場合は、乙は当該役務の履行の義務を免れるものとし、甲は、その代金の支払の義務を免れるものとする。

2 甲の責めに帰すべき理由により役務を行うことができなくなった場合は、乙は、役務の履行の義務を免れるものとし、甲は乙に代金（乙が、役務の履行の義務を免れたことによって得た利益

に相当する金額を除く。)を支払うものとする。

- 3 前項の場合において、乙が保険金、損害賠償その他の代償又はそのような代償の請求権を取得したときは、甲は、その価額の限度で代金の支払義務を免れる。

(損害負担)

第25条 役務を行っている間に事故が発生した場合において、役務を継続すべきときは、その損害は次項から第4項までの規定に従って負担されるものとする。

- 2 前項の事故が甲乙双方の責めに帰することができない理由によるものである場合は、その損害は乙の負担に帰する。ただし、官給品等については、その損害は甲の負担に帰する。

- 3 第1項の事故が甲の責めに帰すべき理由によるものである場合は、その損害は甲の負担に帰する。

- 4 第1項の事故が乙の責めに帰すべき理由によるものである場合は、その損害は乙の負担に帰する。

- 5 第2項ただし書き又は第3項の場合において、乙が保険金、損害賠償その他の代償又はそのような代償の請求権を取得したときは、甲は、その価額の限度で負担を免れる。

(官給品等の滅失又は損傷)

第26条 乙は、官給品等が滅失し又は損傷した場合は、速やかにその旨を文書をもって甲に届けなければならない。

- 2 前項の滅失又は損傷が乙の責めに帰すべき理由によるものである場合は、乙は、甲の指示するところに従い、乙の負担においてこれを修補し、又はその損害を賠償しなければならない。

- 3 前項に規定する場合を除き、官給品等の滅失又は損傷によって生じた損害は、甲の負担に帰する。

第4章 契約の変更等及び解除

第1節 契約の変更

(契約の変更)

第27条 甲は、乙の行う役務の実施が完了するまでの間において必要がある場合は、契約履行期限、納入場所、仕様書の内容その他乙の義務に関しこの契約に定めるところを変更するため、乙と協議することができる。

- 2 前項の規定により協議が行われる場合は、乙は見積書を作成し速やかに甲に提出しなければならない。

- 3 第1項の協議の結果、契約金額を変更する必要がある場合においても、以後しばしば契約金額の変更の必要を生ずる見込みがあるときその他相当と認めるときは、甲乙協議のうえ、その際契約金額の変更のための措置をとることなく、後日これを取りまとめて行うこととすることができる。

- 4 乙は、官給品等の支給又は貸与その他この契約により甲のなすべき行為が遅延した場合において必要があるときは、契約履行期限その他この契約に定めるところを変更するため甲と協議することができる。

(事情の変更)

第28条 甲及び乙は、この契約の締結後、経済情勢の変動、天災事変、法令の制定又は改廃その他の著しい事情の変更によりこの契約に定めるところが不当となったと認められる場合は、この契約の定めるところを変更するため協議することができる。

- 2 前条第2項の規定は、前項の規定により契約金額の変更に関して協議を行う場合に準用する。

(役務の一時中止)

- 第29条 甲は、役務の実施が完了するまでの間において、その役務を一時中止させることができる。
- 2 甲が役務を一時中止させた場合において乙に損失が生じたときは、乙は、その損失につき甲に補償を請求することができる。
 - 3 前項に規定する損失補償の請求は、役務の再開の日から30日以内に文書により行わなければならない。
 - 4 役務を一時中止した後再開した場合の履行期限については、第27条第4項の規定を準用する。

第2節 契約の解除

(甲の解除権)

- 第30条 甲は、次の各号の一に該当する場合は、この契約の全部又は一部を解除することができる。
- (1) 乙の責めに帰すべき理由により乙がこの契約の全部若しくは一部を履行しない場合、又は履行することが不能になった場合
 - (2) 乙が契約上の義務に違反したことによってこの契約の目的を達することができなくなった場合
- 2 甲は、前項に定める場合のほか、甲の都合により必要がある場合は、この契約の全部又は一部を解除することができる。

(乙の解除権)

- 第31条 乙は、甲がその責めに帰すべき理由により契約上の義務に違反した場合においては、相当の期間を定めてその履行を催告し、その期間内に履行がないときは、この契約の全部又は一部を解除することができる。

(違約金)

- 第32条 甲は、第30条第1項の規定によりこの契約の全部又は一部を解除した場合は、代金（一部解除の場合は、解除部分に相当する代金）の10パーセントの金額を乙から違約金として徴収するものとする。
- 2 前項の規定は、甲に生じた実際の損害の額が違約金の額を超過する場合において、甲がその超過分の損害を請求することを防げない。
 - 3 第21条第4項の規定は、違約金の徴収の場合に準用する。

(損害賠償)

- 第33条 甲は、第30条第2項の規定によりこの契約の全部又は一部を解除した場合は、乙の請求により乙に生じた損害を賠償しなければならない。ただし、乙が役務を履行しなかったことにより契約を解除した場合は、この限りでない。
- 2 第31条の規定によるこの契約の全部又は一部の解除は、乙が乙に生じた実際の損害につき賠償を請求することを防げない。
 - 3 前2項に規定する損害の請求は、解除の日から30日以内に文書により行わなければならない。

第5章 調査研究成果の取扱い等

(特許等を受ける権利の取扱)

- 第34条 甲は、この契約に基づく調査研究から新たに得られた成果（文書、図面、図表等に表すことができるものをいう。以下「新研究成果」という。）について国内及び国外における特許、

実用新案登録又は意匠登録（以下「特許等」という。）を受ける権利を乙から承継する。

- 2 乙は、この契約に基づく調査研究に従事する乙の従業員又は役員（以下「従業者等」という。）が職務行為として行った発明、考案又は意匠の創作（以下「発明等」という。）が新研究成果に係るものである場合、その発明等についての特許等を受ける権利を乙が当該従業員等から承継する旨の契約を締結し、又は勤務規則その他の定めをしなければならない。
- 3 乙は、前項の規定に該当すると認められる発明等が行われた場合は、速やかに特許等を受ける権利の承継のための措置をとったうえ、次の各号に掲げる書類を甲に提出しなければならない。
 - (1) 従業者等が行った発明等に係る特許等を受ける権利を乙が承継した旨を記載した証明書
 - (2) 前号の権利を乙が防衛省に承継させた旨を記載した証明書
 - (3) 特許等の出願に必要な発明等の名称、範囲及び内容等を記載した明細書、図面等
- 4 前項第3号の書類の提出があったときは、甲は、当該書類の作成に必要な実費を乙に支払うものとする。
- 5 甲は、特許等の出願にあたっては、出願者の名を航空自衛隊航空中央業務隊司令、発明者等の名を当該発明等を行った提案者等として行うものとする。

（資料の取扱い）

第35条 甲は、契約書又は仕様書の定めるところにより甲に提出された資料（文書、図面、図表等に表わされたものをいう。以下同じ。）の内容についての利用及び処分に関する権利を有する。ただし、当該資料に含まれている乙の固有の資料については、この限りではない。

- 2 甲は、この契約の履行中及び終了後5年間は、新研究成果に関する資料で契約書又は仕様書の定めるところにより甲に提出されたもの以外のもの（契約書又は仕様書に定めるところにより甲に提出されたものに関係があるものに限る。）につき、必要に応じ、その提出を求めることができる。ただし、その期間は、仕様書に別段の定めがある場合はこれによるものとする。
- 3 第1項の規定は、前項の規定により甲に提出された資料について準用する。
- 4 甲は、この契約の履行中及び終了後5年間は、契約書又は仕様書の定めるところにより甲に提出された乙の固有の資料につき、この研究等に関して防衛省が行う技術審査、若しくはその結果の評価その他これに類する業務のため必要がある場合は、その内容を防衛省の内部において利用し及び複製（当該資料のうち乙の指定するものの複製を除く。）することができる。第2項ただし書の規定は、この項において準用する。
- 5 甲は、この契約の履行中及び終了後5年間は、前項の防衛省の行う業務に必要な場合は、契約書若しくは仕様書又は第2項の規定の定めるところにより甲に提出された資料に直接関連がある乙の固有の資料の閲覧、複製（乙の指定するものの複製を除く。）及びその内容を防衛省の内部における利用について乙の許諾を求めることができる。

なお、第2項ただし書の規定は、この項において準用する。

- 6 甲は、甲がこの契約の履行にあたり知得した乙の固有の資料の内容のうち、乙の指定するものについては、乙の承諾のない限り乙の指定する期間、第4項の防衛省の業務に関係のある防衛省の職員以外の者に漏らさないものとする。

（協力）

第36条 乙は、防衛省又は防衛省のために第三者が新研究成果である発明等に係る特許権、実用新案権又は意匠権（特許等を受ける権利を含む。以下「甲の特許権等」という。）を実施する場合、防衛省が前条の規定に基づき、甲に提出された資料の内容を利用する場合又は防衛省のために第三者が甲が利用及び処分の権利を有する前条第1項及び第2項の資料の内容を利用する場合

において、乙が甲から技術者の派遣その他の協力を求められたときは、特に支障のない限り適性な条件でこれに応じなければならない。

(成果の利用)

第37条 甲は、乙が甲の特許権等の実施又は甲が利用及び処分の権利を有する資料の内容の利用の許諾を求めた場合は、特に支障のない限りこれを許諾するものとし、甲の特許権等の実施料又は当該資料の内容の利用料の支払いその他必要な事項は、甲乙協議して定めるものとする。

(成果の開示又は公開)

第38条 乙は、甲が有する特許等を受ける権利の対象となる発明等並びに甲が利用及び処分の権利を有する資料の内容を第三者に開示し、又は公開しようとする場合は、あらかじめ甲の同意を得るものとする。ただし、発明等については、当該発明等の内容が特許庁が発行する公報に掲載公開された後、また、資料については、その内容がすでに公知の事実となったものとして甲が指定した後は、この限りでない。

(立証責任)

第39条 この契約に基づく調査研究に従事する乙の従業者等の職務行為として行った発明等が新研究成果に係るものであるか否かにつき、甲乙間に争いが生じた場合の立証責任は、乙が負うものとする。

第6章 秘密保全

(秘密の保全)

第40条 甲及び乙は、この契約の履行に際し知得した相手方の秘密を第三者に漏らし、又は利用してはならない。

2 乙は、特約条項の定めるところにより、秘密の保全を確実にしなければならない。

第7章 サプライチェーン・リスクへの対応

(サプライチェーン・リスクへの対応)

第41条 乙は、研究等の報告書のほか、本調査研究において納入又は提出する物品（ソフトウェアその他の電子計算機情報を含む。）及び官給品等（以下「納入する物品等」という。）について、情報の漏えい若しくは破壊又は機能の不正な停止、暴走その他の障害等のリスク（未発見の意図せざる脆弱性を除く。以下「障害等リスク」という。）が潜在すると知り、又は知り得べきソースコード、プログラム、電子部品、機器等（以下「ソースコード等」という。）の埋込み又は組込みその他甲の意図せざる変更を行ってはならない。

2 乙は、納入する物品等について、障害等リスクが潜在すると知り、又は知り得べきソースコード等の埋込み又は組込みその他甲の意図せざる変更が行われないように相応の注意をもって管理しなければならない。

3 乙は、納入する物品等について、甲の能力に対抗し、若しくはこれを棄損する動機を有するおそれのある者又はその者から不当な影響を受けるおそれのある者が開発、設計又は製作したソースコード等（乙がその存在を認知し、かつ、障害等リスクが潜在すると知り、又は知り得べきものに限り、主要国において広く普遍的に受け入れられているものを除く。）を直接又は間接に導入し、又は組み込む場合には、これによって障害等リスクを有意に増大しないことを調査、試験その他の任意の方法により確認又は判定するものとする。

4 甲は、乙がもっぱら甲の仕様のために特に導入し、又は組み込むソースコード等の全部又は一部に係る障害等リスクについて乙から照会を受けた場合であって、乙による前3項の規定の実施を補完する必要があると認めるときは、相応の期間をもってこれに回答するものとする。

5 第1項から第3項までに定めるもののほか、乙は、特約条項及び仕様書の定めるところにより、サプライチェーン・リスク（納入する物品等の取扱いに係るサプライチェーンにおいて、障害等のリスクが潜在するソースコード等の埋込み又は組込みその他官の意図せざる変更が行われるリスクをいう。）に確実に対応しなければならない。

6 第3条の規定は、前5項についても適用する。

第8章 雑則（調査）

第42条 甲は、この契約の締結に先立って原価計算方式により算定した予定価格に係る実際の原価を確認する必要がある場合、又はこの契約に基づいて生じた損害賠償、違約金その他金銭債権の保全若しくはその額の算定等の適正を図るため必要がある場合は、乙に対し、その業務若しくは資産の状況に関して質問し、帳票類その他の物件を調査し、参考となるべき報告若しくは資料の提出又は提示を求め、又は甲の職員を乙の営業所、工場その他の関係場所に立ち入らせ、調査させることができる。

2 甲は、前項に定めるもののほか、この契約の事後に締結する契約の契約金額の適正を期するため、原価調査を行う必要がある場合は、乙に対し、この契約に係る支払金額に影響を与えないことを前提として前項の調査を実施することができる。

3 乙は、やむを得ない理由がある場合を除き、前2項に規定する調査に協力するものとする。

（その他）

第43条 この契約の履行については、この契約条項に定めるもののほか、特約条項の定めるところによる。

2 特約条項にこの契約条項と異なる定めのある場合は、特約条項の定めるところによる。

3 甲及び乙は、この契約に関し紛争又は疑義が生じた場合は、その都協議して解決するものとする。

4 この契約において、乙は「責任あるサプライチェーン等における人権尊重のためのガイドライン」（令和4年9月13日ビジネスと人権に関する行動計画の実施に係る関係府省庁施策推進・連絡会議決定）を踏まえて人権尊重に取り組むよう努めるものとする。

（裁判管轄）

第44条 この契約に関する訴えは、東京地方裁判所の管轄に属するものとする。

上記契約の締結を証するため、契約書2通を作成し双方記名押印のうえ、各1通を保有するものとする。